

日本文学研究(古典)

野本 東生

文学研究に身を置いていても、語法上の違和感などを言語表現の不完全性に押しつけてつい放置しがちであるが、じつはそれが文章表現を支える根幹であることは多い。2021年に発表された研究成果のうち、稿者が興味を引いたものについて紹介したい。

奥野陽子「初期歌合における文字遊び—「をみなてし」を中心に」(『国語国文』90-7、2021年7月)は、『亭子院女郎花歌合』を軸に折句や物名などの言語遊戯のあり方を探る論で、条件を満たさぬように見える歌句も、その難度ゆえに意味や音韻などで幅を持たせて許容されていたという実態に迫るものである。なかでも書き記された和歌の文字を凶形として捉えることで、「て→へ」のような読み替えを可能にし、題意の成立を見込む部分が面白い。複数文字利用という二重性累乗の混沌も妄想してしまう。

小田勝『百人一首で文法談義』(和泉書院、2021年9月)は、古注からの論点を整理しつつ、語学研究の立場から『百人一首』を解釈する。語学的な蓋然性を欠く解釈の指摘は特に重い。句読点、カギ括弧を付すのも真新しい印象で、構造把握を徹底する姿勢が鮮明である。あとがきでも触れる小野小町歌は第三句末に句点を入れるが、「いたづらに」〈時を過ごす〉という和歌のコロケーションを採れば、連体修飾の訳出にも支障ないか見え、蓋をしていた疑問を向けたくなるような刺激に溢れる。岡村弘樹「形容詞型の活用とミ語法」(『国語国文』90-3、2021年3月)の論旨を支える、動詞「ミル」に由来して視認性を含むという仮説や、コ系列とソ系列の指示代名詞を話者の世界の内側と外側で弁別する岡崎友子「上代の指示代名詞について」(『国語と国文学』98-12、2021年12月)なども、耳慣れた『百人一首』を挟むと身近になる。

半沢幹一『土左日記表現摘記』(笠間書院、2021年6月)は、冒頭・構成・引用・文頭・文末・主語・指示・会話・和歌・対比の十章から、仮名散文の始発と捉えて、『土左日記』が表現を獲得していく様相を描出する。指示表現に関わる分析から変体漢文の影響を限定的に見るなど、基本的な表現分析を掘り下げて、その射程を広げていく。

佐藤武義編『古代の語彙—大陸・貴族の時代—』(朝倉書店、2021年7月)は、各章をつなぐと通史的な使用語彙層の変遷が数量的な分析から見えてくる。

東原伸明「『源氏物語』「野分」巻の言説分析—「同化」と「離化」・〈語る〉主体の位置と距離の測定—」(『国語と国文学』98-8、2021年8月)と本廣陽子「『源氏物語』における「～ゲナリ」の一特質—物語技法の一つとして—」(『日本文学研究ジャーナル』17、2021年3月)とは、語り手視点と登場人物視点の重なる現象を、別観点で浮き彫りにする。表現主体^(主)の重層化は、享受者や情報引用にも及ぶ問題である。

阿部泰郎「聖西行の駆使する歌の力—詠歌をモノに書き付けること—」(『西行学』12、2021年10月)は、中世説話的観点から歌を書き付けるという行為表現を捉える。

「表現」はどこにでも成立するがゆえに、多くの視角が求められること、同時にその「表現」の認定や分析に慎重さが求められることを身につまされた。(北海道大学)